

初めて日本酒を飲んだのは十五年前くらい前だと思う。オーストラリアのシドニーにあった小さな日本料理屋で、日本語教室のクラスメートと最初の先生と一緒にだった。その料理屋のオーナーは先生の友達だったと記憶している。かなり変わっている二人。シドニーに移民した若いシェフと南米エクアドル出身のラウルという日本語教師。

その初めての日本酒はどこかの地酒で、まるで天国からの味のようだった。それは、どうしてだろう。そのお酒の美味しさそのものによるのか、料理が素晴らしいからか、仲間のお陰か、年末の試験が終わったばかりだったからか、よく分からなかった。残念ながら、シェフやレストランの名前を覚えていないし、そのボトルのラベルもどこかに失くしてしまった。

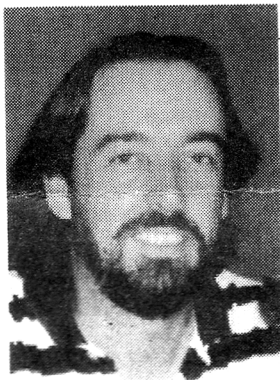
八〇年代のシドニーでは「月桂冠」のような世界中に輸出されている有名なブランド以外の日本酒にお目にかかることはできなかった。あのシェフのふるさとからの個人輸入か何かかな？

今でも様々な造り酒屋や酒屋を訪ねる

時、あのお酒は何だったのだろうか？という思いが頭の中を巡るのである。

外国人だけど日本酒が好きだからお祝い時となれば、いつも美味しい日本酒を楽しむ。最初の給料をもらった時、会社を設立した時、重要なお客様との契約が決まった時、建物を建てる前の地鎮祭、久しぶりに友達と会った時：ワイン、ビールなども好きだけど、私の中では「お祝い」美味しい地酒」

デ克蘭・マーフイー



祝い「美味しい地酒」なのである。

七月末、富士山九合目の山小屋の外で星空を見上げ、火星や流れ星を探しながら富士市、熱海と伊豆半島の夜景を楽しんだ。毎年の富士登山と同じように外はとても寒くて、二十分ぐらい過ぎてから山小屋に戻って囲炉裏を囲んで胡坐をかいた。体を暖めてから夕食を食べ、あれこれ語り合った。

富士山の頂上に登って日の出を拝むには三時ごろには起きなければならぬ。私たちはそれまでの短い時間に仮眠しようとして試みるのだった。

「ちょっと待って！毎年？」一度も登らぬ馬鹿、二度登る馬鹿」って言葉を知っ

ているだろうか？もちろん知っている。日本に来る前にも教室で習った

最初の富士登山は私のためだったが、二回目からはYAMASA言語文化研究所という岡崎市にある日本語学校の留学生のガイドとしてであった。

それって数には入らないよね。仕事なんだから…

仕事とは言え、富士山だけから見える夜景のほかに、頂上に立って日の出の写真や留学生たちの笑顔を見ながら祝うのは楽しいことだ。足が痛くても、日焼けをしても、重いリュックのせいで肩が痛くて疲れていても、気象観測所の前に立って大きな大吟醸酒をリュックから出している乾杯は堪えられない。ある年は、その日本酒は大吟醸、またある年はどこかの地酒。今年は半田市の「国盛」の大吟醸だった。毎年毎年仕事で富士山に登らなければならぬのは大変だと思われるだろうが、頂上に着けば、そこは祝いの席になる。麓に下りても祝いの席になる。登山は上りも下りも苦しいから。実は「こだけの話だが、私にとってもこの富士登山ツアーの一番の楽しみは、岡崎へ向かう帰路、寄り道をして美味しい地酒を探ることだ。その十五年前の天国からの味の地酒はまだ見つかっていない。

(岡崎市羽根町)